

[ここに入力]

今年の入学式は、3年ぶりにマスクなしに戻ったことでしょうか。新しい世界に向かって出発するワクワクした気持ちは、今でも思い出します。期待と希望にあふれていますね。そんな思いを春の花は祝っているようです。

紅葉台



新聞

第72号

2023年

4月8日

発行人：関谷 孝

万葉の歌の碑

中山 峯雄

シニア散歩で訪れた3か所に同じ歌の碑があるのを見ました。それは、府中郷土の森博物館の梅園、めじろ台の万葉公園、多摩市の一本杉公園です。当時の防人任務のため赴任する際に妻が読んだ歌です。遠い旅路に思いをはせ、無事に帰還できるかも分からない別れを歌に込めた妻のおもいはいかばかりだったのでしょうか。この歌碑は、江戸から九州に向かって歩く道すがらにあったのではとされます。



万葉公園 歌碑

碑は1955年に南多摩郡横山村が八王子市に編入される際にその記念として建てられ、「万葉公園」は1971年、めじろ台住宅の開発に合わせて整備された。

「赤駒を山野に放し取りかにて

多摩の横山徒歩ゆかやらむ」

出征するする防人の妻の歌 (750年頃) 万葉集 14巻

防人は663年に朝鮮半島での「白村江の戦い」に敗れたのを受け、唐や新羅からの侵攻に備えて、北部九州沿岸などに置かれた警護兵士。翌664年に吉岐・対馬・筑紫に防人が設置されたとの記述が「日本書紀」にある。当初は東国から集められ、任地で耕作して自給自足の生活だった。3年とされた任期は守られず、帰郷しない防人も多かった。防人制度は826年に廃止されている。



武蔵の防人は、まず現在の府中市にあった国府に集合し、多摩川を南岸へ渡り、相模の国の国府があった現在の平塚市へ向かい、その道筋は現在の多摩市の南部に連なる尾根の上の見晴らしの良い道です。西には相模平野の向こうに丹沢の山並、その後ろに高くそびえる富士山、その右方向に武蔵の国が広がり、遠方に奥多摩の山々が見渡せます。

“多摩の横山”は武蔵国分寺から相模原にかけて多摩丘陵の広い地域にあたり、府中市、八王子市、多摩市(一本杉公園)に、この万葉の歌碑があります。



過去2回訪れていますが、園内に“多摩の横山”の万葉の歌碑があることに気が付きませんでした。ここ武蔵府中は九州に向かう防人が“多摩の横山”を通り相模に向かう入口で、次の国府である平塚までの長い道のりのをどのような気持ちで歩いて行ったのか、家族との再開は3年後、想いは深かったと思います。

3月28日に亡くなった坂本龍一さんは、世界的な音楽家でもある一方、脱原発、明治神宮外苑の再開発についても病床から小池都知事に再開発反対の手紙を寄せました。世界は、坂本さんの功績を称えました。「後悔しないように」と。

『原発をとめた裁判長 そして原発を止める農家たち』

上映会に参加して

阿部 ひろみ

樋口英明さんは現在70歳。元裁判官。樋口さんは、2014年5月21日、福井地方裁判所において大飯原発運動差し止めの判決を裁判長として言い渡しました。3.11以降初めての言い渡しでした。一判決文より抜粋—

『主文 被告は大飯発電所3号機及び4号機の原子炉を運転してはならない』

国策である原発問題に、司法がこのような見解を示した結果、注目を浴びることとなりました。樋口さんの判決の根拠となった要因は、**・原発事故のもたらす被害は極めて甚大である。・地震大国日本において、そのため原発には高度の耐震性が求められる。**しかし、我が国の原発の耐震性は極めて低い(停電、断水したりするだけでも過酷な事故につながる)この様に判決の内容は、原告住民の人格権にもとずいた極めてシンプルでわかりやすいものでした。そのため多くの人々にとって、腑に落ちる理論であったのです。樋口さんは、現在も要請があれば、各地に出向いて詳細なデータに基づいた確かな理論で講演を続けています。志を同じくする、脱原発弁護団全国連絡会の代表 河合弘之弁護士等と共に地道な活動も行われていることを知りました。



そして**原発を止める農家たち**。近藤恵(コンドウ ケイ)



さん 福島県二本松営農ソーラー(株) 代表。2006年より専業有機農業経営。2011年3月11日の原発事故に被災し、一時廃業。

その後2021年よりソーラーシェアリング

で、営農法人として兼業農業復帰。二本松ご当地エネルギーを、みんなで考える会社を目指している。2022年には、**ソーラーシェアリングパネルを従来の設置方法ではなく、フェンス状に垂直設置して、パネルの間を広く開け長い帯状の畑にすることで、より大きな農業機械でも操作が可能となり、獣害防止フェンスのようにも使えるような工夫もしているとのこと。**経験豊かな先輩の知識や技術を学びながら働き盛りの協力者も得て、日々品種選び、種まき、天候に対応して成果を出すための試行錯誤を重ねている皆さんの顔はとても健康的な笑顔でした。サプライズで上映当日来場されたのは、この映画製作に携わったドキュメンタリー監督小原浩靖さん。映像を通して樋口さんたちのこうした活動を、よりたくさんの人々に伝えていきたい。そして第二弾に向けての製作を力強く語ってくれました。この映画を観て私は、原発の問題は単に国策と諦めず、また専門的で難しいと決めつけず、そして未来を生きる人々へ負の遺産を残さぬよう、関心を深め様々な考え方にも耳を傾け、自分事として向き合うことの大切さを痛感しました。(下記 参考資料)